フロンティアスクール中間報告書

都道府県名	新潟県

Ⅰ．学校の概要（平成 15 年 4 月現在）

学校名	上越市立大手町小学校								
学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	2	2	1	１３	１８
児童数	４８	６３	５３	５７	５７	５８	4	３４０	

Ⅱ．研究の概要

1　研究主題

確かな学力をはぐくむ教育課程の創造
～総合的な学習の時間の学びを生かして自ら学ぶ子どもの育成～

2　内容と方法

(1)　実施学年・教科

実施学年：１～６学年
教科等：総合的な学習の時間，生活科，国語科，算数科，社会科

- 全学年を対象としたのは，１学年から学年ごとの積み重ねで確かな学力をはぐくんでいくため。
- 総合的な学習の時間，生活科，国語科，算数科を対象としたのは，学校としてこれまでの研究実績があるため。
- 社会科を対象としたのは，総合的な学習の時間との関連を図った実践を行うため。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度

○テーマ
総合的な学習の時間と各教科等との関連の在り方と国語科と算数科における指導方法の工夫・改善

○研究の見通し
総合的な学習の時間と各教科等との関連を図るとともに，特に国語科と算数科において指導方法を工夫することにより，子ども一人一人が自ら学び，確かな学力を身に付けていくことができる。

○研究内容・方法

① 総合的な学習の時間の学びを生かした教育課程の編成

確かな学力をはぐくむために，自らが問題にかかわり，自ら学びを進めていくよさを発揮する場を保障することが大切である。また，個に応じた指導として，習熟を図ったり，発展的な課題に取り組んだりできる時間や場の保障，教師の指導体制の工夫を教育課程全体で考えていく必要がある。そこで，次の３点から研究を進める。

- 総合的な学習の時間の学びを各教科や道徳，特別活動で生かして学ぶ姿を集積し，そのよさを明らかにする。
- 子どもの資質・能力が十分に発揮できる場や時間を工夫して実践し，そこでのよさや問題点を子どもの姿から考察する。
- 子どもや保護者による学習の理解度や満足度等に関する意識調査，「教育を語る会」（学年の保護者による話し合いの場）や学校評議員による提言，学力検査の結果等を検討することから課題を明確にし，教育課程編成及び実施に生かす。

	② 総合的な学習の時間の学びと各教科等との関連の在り方 確かな学力をはぐくむために，総合的な学習の時間の学びと各教科等との関連を図ることが有効であると考える。そのためには，総合的な学習の時間における指導と評価の在り方を明確にして指導に当たり，より充実した活動にしていく必要がある。また，総合的な学習の時間と各教科等との関連を図る方法を明確にしていく必要がある。そこで，次の３点から研究を進める。 ・ 総合的な学習の時間の評価規準から子どもの学びを見取り，効果のある活動であったかどうかについて考察する。 ・ 総合的な学習の時間と各教科等の活動の中でそれぞれの学びを生かして学ぶ姿を見取り，その姿を発揮するための有効な手立てを明確にしていく。 ・ 評価一覧表を生かして個に応じた指導を積み上げ，子どもの変容から身に付けた学力を考察する。 ③ 個に応じたきめ細かな指導のための指導方法の工夫・改善 各教科等の学習指導に総合的な学習の時間の学びを生かす方法を探ると同時に，個に応じたきめ細かな指導を行うための指導方法を工夫していく必要がある。そこで，次の２点から研究を推進する。 ・ 総合的な学習の時間の学びを生かした学習を展開し，よさや問題点を子どもの姿から考察する。 ・ 個々の課題や習熟の程度に応えるための活動展開や指導体制を工夫して実践し，個に応じたきめ細かな指導のための有効な手立てを明確にする。

平成15年度	○テーマ 総合的な学習の時間の学びを生かすための国語科・算数科・社会科の単元開発と指導方法の工夫・改善 ○研究の見通し 国語科・算数科・社会科で，総合的な学習の時間の学びのよさを生かして学ぶことができる単元を開発し，指導方法を工夫・改善していくことで，子ども一人一人が自ら学び，確かな学力を身に付けていくことができる。 ○研究内容・方法 ① 個に応じたきめ細かな指導のための指導方法の工夫・評価・改善 習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行うために，学習過程や学習形態，指導体制を工夫する必要がある。また，個の学びを見取るための評価方法を工夫し，指導に生きる評価をめざす。そこで，次の点から研究を推進する。 ・ 総合的な学習の時間の学びのよさを生かすための要件を見直す。 ・ 子ども一人一人が学習内容を身に付けるために有効な学習形態や指導体制を探る。 ・ 評価規準を明確にして指導に当たり，子どもの学習状況を的確に把握する。 ・ 評価方法を工夫して子どもの学びを見取り，指導と評価の一体化を図る。 ② 個に応じたきめ細かな指導のための教材・単元開発 習熟の程度に応じたきめ細かな指導を行うために，子どもたちが一層興味や関心をもつことができる教材や単元を開発していく必要がある。そこで，次の点について研究を推進する。 ・ 発展的・補充的な学習のための教材を開発する。 ・ 子どもの意識の流れを大切にし，習熟の程度に応じて学ぶことができるような単元

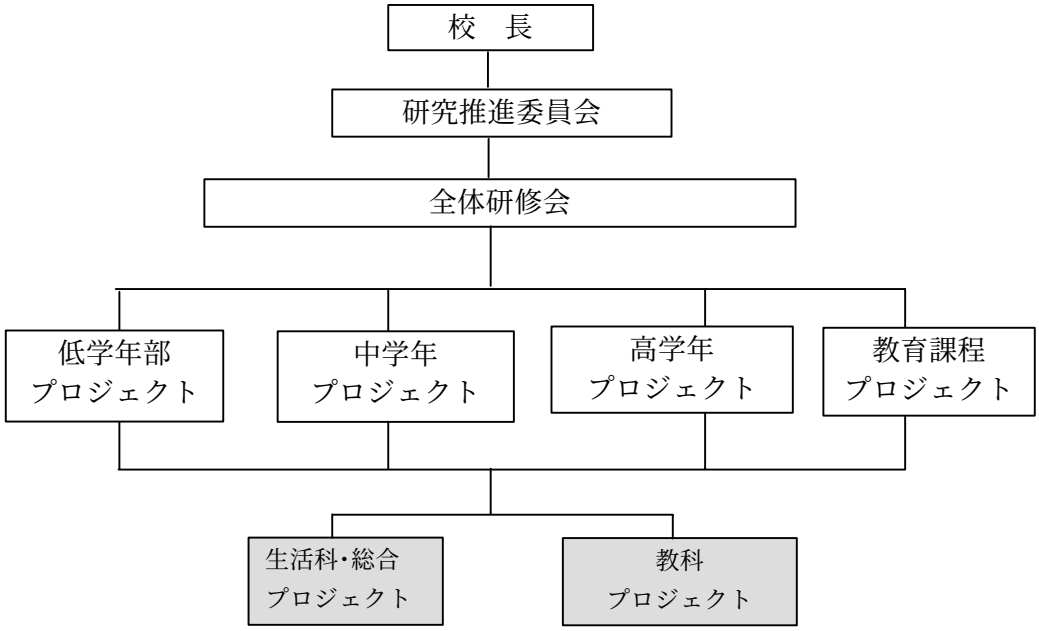
	を開発する。 ③　確かな学力をはぐくむための教育課程編成の在り方 確かな学力をはぐくむために，自ら問題に取り組み，自ら学びを深めたり広げたりしていく場を教育課程に位置づける必要がある。また，個に応じた指導として，習熟を図ったり，発展的な課題に取り組んだりできる時間や場を保障していくことも必要である。そこで，次の３点から研究を進める。 ・ 総合的な学習の時間の学びを十分に生かして学習することができる教育課程の在り方を探る。 ・ 子どもや保護者による学習の理解度や満足度等に関する意識調査，「教育を語る会」（学年の保護者による話し合い）や学校評議員による提言，学力検査等の分析・検討をもとに，教育課程の改善の方向を探る。

平成16年度	○テーマ 総合的な学習の時間の学びを生かして確かな学力をはぐくむための指導方法の工夫・改善と教育課程の編成 ○研究の見通し 総合的な学習の時間の学びのよさを生かして学ぶことができる教育課程を編成する。そして，指導方法を工夫・改善し，子どもの学びをきめ細かに評価することによって，子ども一人一人が自ら学び，確かな学力を身に付けていくことができる。 ○研究内容・方法 ①　個に応じたきめ細かな指導のための指導方法の工夫・改善 個に応じたきめ細かな指導を行うための学習形態や指導体制について，実践を通して改善していく。また，開発した教材や単元について実践しながら，学習指導の改善を図っていく。そこで，次の２点から研究を進め，成果を地域の学校に発信する。 ・ 子ども一人一人が学習内容を確実に身に付けることができるような学習形態や指導体制を工夫し，その有効性と問題点を明確にする。 ・ 「確かな学力をはぐくんでいる姿」の背景を探ることから学習指導改善の視点を明らかにし，単元や授業の中での活用方法を整理する。 ②　個に応じたきめ細かな指導に生きる評価の在り方 子どもの学力や学び方の特徴を把握するために，評価方法を工夫していく必要がある。また，個の学びを見取るための評価方法と指導への生かし方を明確にして指導に当たる必要がある。そこで，次の２点から研究を進め，その成果を地域の学校に発信する。 ・ 実践を通して，子どもの学習状況を見取るための方法や観点を見直し，評価の考え方や手順を明確にする。 ・ 個人カルテやコンピュータソフトを生かした評価一覧表，活動の観察など評価方法を工夫して子どもの学びを評価し，有効な評価の方法について整理する。 ③　確かな学力をはぐくむための教育課程編成の在り方 子ども自らが問題にかかわり，自ら学びを進めていくよさを発揮する場を具体化した教育課程について，さらに評価し改善していく。また，個に応じた指導として，習熟を図ったり，発展的な課題に取り組んだりできる時間や場を保障するための指導体制についても評価と改善を行っていく。そして，教育課程の在り方や改善の方策を地域の学校に発信する。 ・ 子どもの資質・能力が十分に発揮できる場や時間を工夫して実践し，よさや問題点を子どもの姿から考察し，教育課程を改善する。 ・ 子どもや保護者，地域の声を集約し，これまでの研究成果と合わせて教育課程の評

	価に生かしていく。 ・ 確かな学力をはぐくむための教育課程の考え方や教育課程を改善していく方策を整理する。

(3) 研究推進体制

フロンティア事業に関する実践研究組織図



※ ▭ は，平成 15 年度に新たに組織した部分

＜各組織の役割＞

① 研究推進委員会
- 研究主任，学年主任，教務主任，教頭で構成し，研究推進計画に基づき，研究全体をリードしていく。
- 日々の実践の中で，各学年の活動について研究内容に基づいた指導・助言をする。

② 全体研修会
- 全職員で研究内容等について協議し，共通理解を図る。

③ 研究プロジェクト
- 研究課題の具現を目指して，実践を積む。
- 実践の成果や実践上の課題を研究推進委員会に提供する。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１　研究の成果

(1) 総合的な学習の時間と各教科等との関連についての考え方や関連を図る方法を明確にできた

①　総合的な学習の時間の学びのよさを生かすことで確かな学力をはぐくむ

総合的な学習の時間で学ぶ子どもは，自分で問題を見付け，自分で追求を進めていく。このような子どもの姿が見られるとき，一連の活動が「自分」という意識で貫かれていると思われる。それは，子どもが対象から自分にとっての価値を見いだし，自分の問題として解決に向かっているからである。こうした総合的な学習の時間の学びのよさを，次の点から各教科等の学習に生かしている。

ア　子どもが資質・能力として生かす

総合的な学習の時間を成立させるために大切な資質・能力を洗い出した。そして，その中から，各教科等の学習が成立するときも子どもが発揮していると思われる資質・能力を探り，次の５つに整理した。この資質・能力を「共に培いたい資質・能力」として，総合的な学習の時間でも各教科等の学習でも十分に発揮できるように支援している。

- 問題解決能力
- コミュニケーション能力
- 情報活用能力
- 内省的な思考
- 共生的な態度

イ　教師が自ら学ぶ子どもを生み出すための学習指導方法として生かす

（ア） 学習過程に生かす

子どもが自分から価値を求めて動き出し，活動を進めるよさを学習過程として教科の活動展開の中に生かしている。

自分で問題を見つけ追求する　→　自ら考える　→　伝える

（イ）個の学びに応じた指導に生かす

○　一人一人の学びの評価

総合的な学習の時間の評価の考え方を生かし，各教科等の学習でも評価一覧表や個人カルテを用いて一人一人の学びの状況を評価して指導の改善を行っている。そして，子どもに自己評価の力を付け，学ぶ意欲をさらに高めるために，評価の場を意図的に設定した。

○　一人一人の学習状況に応じた学びの保障

本校の総合的な学習の時間では，一人一人の学習が成立するように，次のような支援をしている。

- 総合性，多様性のあるテーマを設定する。
- 対象と深くかかわることができるように，息の長い活動を保障する。
- 「没頭」「追求」「自己表出」の活動に応じて一人一人の子どもにかかわる。
- 体験と思考の相互作用を図るための場を大切にする。
- 活動における拡散と収束の場をタイミングよく設定する。

こういった支援や見取りの考え方を，子ども一人一人の学びが成立するように各教科等の学習でも生かしている。

②　総合的な学習の時間と各教科等との関連を図ることで確かな学力をはぐくむ

子どもが各教科等で学んだことを総合的な学習の時間に生かしているととらえられる姿と総合的な学習の時間で学んだことを各教科等の学習に生かしているととらえられる姿を集積する。そこから，子どもが関連させているものを，次の３点に整理した。

- 学習内容の関連
- 学習方法の関連
- 資質・能力の関連

私たちは,「学習内容」「学習方法」「資質・能力」のうち，特に「資質・能力」に着目した。それは，総合的な学習の時間でも各教科等の学習においても，生き生きと学ぶ子どもは，これまでに身に付けた知識や方法，資質・能力を総動員して対象にかかわる。このような子どもの内面には，自然に学習した内容や方法を想起し，関連付ける状況があると考える。この関連が図られた学びには，子ども一人一人がもっている資質・能力を十分に発揮して学んでいる姿がある。そこで，関連を図る状況で特に発揮される資質・能力を「共に培いたい資質・能力」として，総合的な学習の時間でも各教科等の学習でも十分に発揮できるようにしている。

③　関連を図るための指導方法

総合的な学習の時間や各教科等において学習内容や学習方法，資質・能力の関連を図るために，次のような方法で指導した。

ア　指導の時期を意図的に設定する

教科のある単元の学習をした後で，あるいは，学習をしながら総合的な学習の時間を進めることで子どもの追求や思考が広がったり深まったりすることが期待できる。そこで，意図的に指導の時期を考え，子どもが学習内容や学習方法，資質・能力を関連させやすくしている。

イ　活用場面を意図的に設定する

教科で学んだ内容を総合的な学習の時間で活用することによって学びが深まる場合や総合的な学習の時間の追求方法を教科の学習に生かすことによって追求的な学習が深まる場合などが考えられる。このとき，意図的に活用できるような資料を提示したり，振り返りの場を設定したりする。

④　総合的な学習の時間を中核にしたカリキュラム表の作成と実践

総合的な学習の時間と各教科等との関連を明確にするために，学年ごとに総合的な学習の時間を中核にしたカリキュラム表を作成した。（添付資料「確かな学力をはぐくむ」p.74～p.80 参照）自ら問題を見付け追求することや学習内容の確実な定着，道徳的な心情や判断力を培うために，各教科・道徳・特別活動・総合的な学習の時間のバランスを図り，年間の活動を意図的に配置する必要があるからである。

(2)　学習指導方法を改善する視点を明確にして実践を行うことができた

国語科と算数科で総合的な学習の時間の学びを生かした学習過程で単元を展開し，子どもの学ぶ姿から確かな学力をはぐくんでいると考えられる３つの姿を見取ることができた。

- 基礎的・基本的な知識や技能を習得する姿
- 新たな学びを生み出す姿
- 仲間とかかわり自らの学びを高める姿

この３つの姿を具現していくことが確かな学力をはぐくむことになると考え，どの学習でも大切にしている。そして，この「確かな学力をはぐくんでいる３つの姿」を見取ることができた背景を探ることから，次のような学習指導改善の視点を見いだした。

- 自己決定の場の保障
- 知識や技能を活用する体験的な活動の保障
- 学び合いの場の保障
- 習熟の程度に応じて学ぶ場の保障
- 自分を見つめる評価
- 問題意識を顕在化する課題設定

これらの中からいくつかの視点を重点化して授業を構想した。

(3) 学習形態や指導体制を工夫して授業実践を行うことができた

子どもが学習や活動を進めていく過程では,一人一人の子どもの理解の程度や技能の習熟の程度,追求の方法,学習課題に対する意欲などに違いがある。そうした学習の状況を適切に把握し,支援・指導していくことは，子どもが確かな学力を身に付けるための重要なポイントとなる。このような

個に応じた指導として，個性や習熟の程度に応じた少人数指導を行っている。少人数指導は，次の点を基本として進めている。

- 習熟の程度に開きが見え始める３・４年生の算数科の授業において，担任に他の教師を１人加え，１学級を２人で指導する。
- 個に応じた指導を目指すために，指導方法・指導体制の工夫改善にかかわる実践を行う教科・単元で，担任に他の教師を加えて，少人数指導を行う。

具体的には，学年のカリキュラム表に課題や習熟の程度に応じて学ぶための少人数指導を行う単元を明示し，年間を見通した中で基礎的・基本的な学習内容を身に付けられるようにしている。主に，算数科の「式と計算」「図形」の領域と国語科の「話す・聞く」「読む」の領域で実践をしている。それは，習熟の程度の開きがやや大きい領域であり，課題別学習や習熟の程度に応じた少人数指導をすることで学習効果が上がりやすいと考えたからである。(添付資料「確かな学力をはぐくむ」p.74～p.80 参照)

(4)　個に応じたきめ細かな指導のための単元を開発することができた

一人一人に学習が成立するように，子どもの意識，学習指導改善の視点，学習形態，指導体制等の面から単元を構想して実践してきた。実践の中から，例として，各学年ごとに１つ紹介する。(他の実践は添付資料「確かな学力をはぐくむ」参照)

＜第１学年＞

教科・単元名	算数科「たし算の絵本を作ろう」
ねらい	繰り上がりのある加法の計算の仕方を理解し，進んで加法の計算をしようとする。
単元の特徴	・単元を通して，絵本を使った問題作りを行っていく。 ・絵本を３コマ漫画のように作成していくことによって，問題作りを段階を追って進めたり，日常生活の場面で加法が使われる場面に気付いたりできる。
指導体制	１つの学級を，担任に他の教師１人を加えて２人で指導する。前半はＴＴ指導で，後半はＴ１は，絵本作りの子どもを，Ｔ２は絵本を使って問題を解き合う子どもを支援する。
教材等の工夫等	絵本作りに使用するための ・10 のまとまりの枠 ・問題文に使う具体物の絵やシール 習熟の程度に応じて学べる絵本の形態 ・具体物の操作を図の上で行うことができるノートのような絵本 ・加法の増加と合併を比較できる絵本

＜第２学年＞

教科・単元名	国語科「スイミー」
ねらい	自分の選んだ表現方法で表しながら，場面の様子を想像しながら読み，物語の楽しさを味わう。
単元の特徴	・「スイミー」を１年生に紹介するために，「気持ちや内容を楽しく伝える」「自分の言葉で書き換えて紹介する」の２つの課題から選択して取り組む。 ・１時間の学習の終わりに振り返りカードを書くようにし，教師の見取りに生かす。
指導体制	１つの学級を，担任に他の教師２人を加えて３人で指導する。 子どもの表現方法に合わせて，分担して指導する。また，読みが深まっていない子どもには，本文に立ち戻り，会話をしながら支援していく。
教材等の工夫等	・登場人物の気持ちを台詞として書き込めるようなワークシート ・紙芝居に使えるスイミーの絵や文章など，ペースに合わせて学習できるような教材

＜第３学年＞

教科・単元名	社会科「みんなのまちのパンフレットを作ろう」
ねらい	上越市の特色ある地形などの様子や主な公共施設の場所と働きを，観察・調査したり白地図にまとめたりして調べ，上越市の場所による様子の違いや特色を具体的に考える。
単元の特徴	・単元を通して，上越市のパンフレットを作る活動を進めていく。 ・5 つの調査場所から１つを選択し，調査活動の方法も子どもが考える。 ・同じ場所を調査した者同士がその場所の特色を考える場と，違った場所を調査した者が情報交換する場を設けることで，新たな見方や考え方に気付いていく。
指導体制	2 学級合同で 2 人の担任が指導を行う。5 つの調査場所に出かける時には，担任の他に 3 人の教師が加わり，それぞれの調査場所を担当する。ＰＴＡの「学び・ささえ・隊」（学習活動を支援する保護者）の協力も得た。
教材等の工夫等	・子どもがパンフレットを作っていくために必要な白地図やワークシート ・調査のルートやバスの時間などを書き込める計画表

＜第４学年＞

教科・単元名	算数科「面積」
ねらい	身の回りのものの広さ比べや求積公式を見いだす活動を通して，面積の概念や意味を理解するとともに，図形の面積について，公式を用いて求積する。
単元の特徴	・身の回りにあるものを自分で考えた任意単位をもとに「いくつ分」として数値化する場を設け，単位面積を活用するよさに気付けるようにする。 ・課題解決のタイプに合わせた学習の場を設け，必要な支援や展開を工夫することで個に応じた指導を行う。
指導体制	学級の枠を取り払い，2 人の担任に他の教師 1 人を加えて 3 人で指導する。「具体物を操作して求積する」「補助線を引いて求積する」「念頭で求積したり，発展的な図形の求積をしたりする」3 つのグループのタイプに合わせて指導する。
教材等の工夫等	・子どもの求積方法に応じてカードに貼っていくための「アイテムシール」（求積する考え方を 7 種類の絵に表したシール） ・小ステップで学べるような補充的なプリントや複雑な複合図形の面積を求積する発展的プリント

＜第５学年＞

教科・単元名	社会科「高田平野の米づくり」
ねらい	米づくりに取り組む人々の工夫や努力，願いを理解したり，多くの人々が米の生産を支えていることや米づくりがかかえている問題点に気付いたりしながら，米づくりに対する自分の考えをもつ。
単元の特徴	・「米づくりに未来はあるか」という課題に対する自分の立場を明確にして追求していく。 ・「未来はある」「未来はない」の 2 つの立場に分かれて意見を交流し合う討論会を設けることによって，新たな視点や考えに気付いていく。
指導体制	学級の枠を取り払い，2 人の担任に他の教師 1 人を加えて 3 人で指導する。追求の場面では，追求方法に応じて分担して指導する。討論会では，2 人は「未来はある」「未来はない」の考えをもつそれぞれのグループに付き，一人は進行役をする。
教材等の工夫等	・討論会のときに，それぞれがどのような視点から追求をしているかが分かるように，一人一人の子どもに配布した一覧表 ・高田平野の米づくりに関する資料を，子どもが分かりやすいようにまとめたもの

＜第６学年＞

教科・単元名	国語科「生活を見つめよう―12 歳の主張―」
ねらい	毎日の生活の中で，興味・関心のある問題について自分の考えをもち，新聞に投稿するために情報を集め，自分の考えが読み手によく伝わるように組み立てを工夫して文を書く。
単元の特徴	・相手意識をもち，書く目的や意図を明確にするために，書き上げた文章を新聞に投稿するという課題を提示する。 ・「感動・共感」「願い・希望」「疑問・怒り」の 3 つからテーマを選択し，テーマ別に分かれて作文を書く。 ・子どもの自己評価や相互評価を活用して，学習状況を把握し，個に応じて支援する。
指導体制	作文を書く活動の場では，子どもの願いを参考に「自分１人で書ける」「自分１人で書くには不安がある」「自分１人で書くのは無理」の習熟の程度に応じた 3 つのグループを編成する。「１人で書ける」子どもは見守る程度にし，「自分１人で書くには不安がある」「自分１人で書くのは無理」を選んだ子どもを 3 人の教師で指導する。
教材等の工夫等	・新聞の投書を，「感動・共感」「願い・希望」「疑問・怒り」の 3 タイプに分けた教材 ・効果的な文を書く工夫を学ぶ資料 ・自己評価カード　・相互評価カード

(5)　評価方法を明確にして子どもの学びを見取り，指導と評価の一体化を図ることができた

子どもの学びの現状を的確にとらえ，子どもに返したり，次の学習や活動の指導に生かしたりしていくことが大切である。子どもの学びを結果として評価するのではなく，子どもが次の活動への見通しをもったり，意欲をもったりするためのものであると考える。このように，子どもの学びを評価することが子どもの次の学習へ結び付くということを指導と評価の一体化であると考える。本校では，総合的な学習の時間の学びのよさを生かすという考え方から，次の点を学習評価の基本として，評価を行っている。

①　評価の観点

各教科，特別活動，道徳は，学習指導要領に示された観点別評価を行う。総合的な学習の時間は，これまでの実践の中で集積した学習が成立する様相から導き出した５つの評価規準から評価する。この他に，「共に培いたい資質・能力」についても評価を行う。これは，各教科，特別活動，道徳と総合的な学習の時間の評価だけでなく，総合的な学習の学びを各教科等の学習に生かすために大切になる資質・能力を十分に発揮することによって，確かな学力が身に付くと考えるからである。

②　評価項目，評価規準の重点化

実際の学習場面の評価では，指導したことに対して子どもの反応としてフィードバックされ，評価が進められていく。しかし，すべての学習過程で全員の子どもを評価するのは無理がある。評価のための作業を最小限にし，指導のために十分な時間が確保できるようにするために，その単元や活動の学習の成立に欠かせない評価項目，評価規準を重点化して評価を行う。

①と②をまとめると，下表のようになる。

	各教科，特別活動における評価	総合的な学習の時間における評価
学ぶ意欲，判断力，思考力など	学習指導要領に示された目標に照らして，その実現状況を観点（関心・意欲，判断力，考え方，知識・理解）ごとに評価規準を設け，活動に応じて重点化して評価する。	学習が成立する様相から導き出した５つの評価規準から評価する。 それぞれの活動のねらいに応じた評価規準を選んで評価する。
共に培いたい資質・能力	教育課程全体の中で，共に培いたい資質・能力がどのように高まっているかを評価する。 ５つの共に培いたい資質・能力の中から，その単元や活動で重点化して評価する。	

③　評価場面と評価方法の明確化

評価のための作業を最小限にし，しかも子ども一人一人の学びを的確に評価するために，評価のための最適な評価場面と評価方法を考えておく。

④　評価の集積

単元や活動のねらいに応じて重点化された評価規準から評価した子どもの学びを評価一覧表にして集積していく。

⑤　評価の総括

それぞれの評価規準から評価した子どもの学びは，単元，学期末，学年末という期間で，総括をしていく。それぞれの観点でどの程度の達成状況にあるかをまとめる。その際，学習が終了しても学習したことを生活の中に生かそうとしたり，さらに学習を深めたりしていることもある。子どもの変容を長い目で見て評価することを重視する。

これらの考え方をもとに，教科の学習や総合的な学習の時間で，一人一人の学びを見取り，支援することができた。

(6)　多面的な評価をもとに，教育課程の改善の方向を見いだすことができた

①　子どもへの意識調査から

ア　学習達成についての意識

国語科，算数科の評価規準に合わせた設問について，どの程度達成していると考えているかをたずねるアンケート調査を実施した。その結果を示す。

- 昨年度と今年度の第５学年の意識調査を比較して示す
- 比較は，５ポイント以上差のあるものを矢印で示した

A：とてもあてはまる　B:ややあてはまる　C：あまり当てはまらない　D:まったくあてはまらない
の４つの選択肢。A と B を選択したものを合計して肯定派とした。

	設　　問	肯定派（%）		
		14 年度 ５学年	15 年度 ５学年	比 較
国語	国語の授業がわかる	85.4	94.2	↑
	「よし，がんばって勉強するぞ」と思う	70.8	78.8	↑
	相手にわかるように話したり，大事なことをしっかり聞いたりできる	75.0	80.8	↑
	調べたことや考えたことを相手にわかるように書くことができる	81.3	65.4	↓
	かかれている場面の様子を中心になることを考えて読むことができる	72.9	63.5	↓
	文字の正しい読み書き，正しいことばづかいがわかる	81.3	75.0	↓
算数	算数の授業がわかる	85.4	92.3	↑
	「よし，がんばって勉強するぞ」と思う	81.3	78.8	
	問題をどうしたら解決できるか考えることができる	77.1	75.0	
	正しく計算したり，図形をかいたりできる	79.2	78.8	
	いろいろな計算のしかた，図形の名前，図形やグラフのかきかたがわかる	89.6	88.5	

国語に関しては,「授業がわかる」「がんばって勉強するぞと思う」「相手にわかるように話したり，大事なことをしっかり聞いたりできる」と意識する子どもは増えている。しかし,「相手にわかるように書く」「中心になることを考えて読む」「読み書き，正しいことばづかいがわかる」と意識する子どもは減少している。

算数に関しては,「授業がわかる」と意識する子どもが増え，他の項目ではそれほど変化は見られなかった。

国語・算数とも「授業がわかる」という子どもは増加しており，学習についての満足度は昨年より高まる傾向にあるととらえられる。これは，課題提示や自己決定の場の保障などの点から学習指

導の改善を図ってきた効果であると考えられる。しかし，国語科の「相手にわかるように書く」「中心になることを考えて読む」「読み書き，正しいことばづかいがわかる」とする子どもの割合が減っており，「読む」「書く」の領域で，満足感のもてる授業に改善していく必要がある。

イ　指導体制についての見方

国語科と算数科において，指導体制を工夫して授業実践を行ってきた。指導体制について，子どもがどのような意識をもっているかを以下の設問で調査した。この調査は，昨年度は実施していないため，今年度のみの結果を示す。

A：とてもあてはまる　B:ややあてはまる　C：あまり当てはまらない　D:まったくあてはまらない
の４つの選択肢。A と B を選択したものを合計して肯定派とした。

	設　　問	肯定派（%）			
		３年	４年	５年	６年
ＴＴ指導	２人以上の先生から教えてもらうので勉強の内容がよく分かる	90.2	96.2		
	先生や友達の話をよく聞いている	86.3	90.6		
	自分の力で学習問題を解決しようとしている	82.4	86.8		
	分からないことなどを先生に聞きやすい	82.4	84.9		
	これからも２人以上の先生から教えてもらいたい	76.5	81.1		
少人数指導	グループやコースに分かれて学習するので勉強の内容がよく分かる	86.3	96.2	96.2	88.5
	先生や友達の話をよく聞いている	88.2	90.6	86.5	80.8
	自分の力で学習問題を解決しようとしている	78.4	88.7	84.6	76.9
	分からないことなどを先生に聞きやすい	74.5	84.9	65.4	59.6
	これからもグループやコースに分かれて学習したい	70.6	86.8	76.9	63.5

ＴＴ指導，少人数指導とも「勉強の内容がよく分かる」とする子どもが９割前後で，どちらとも肯定的にとらえていることが分かる。また,「自分の力で学習問題を解決しようとしている」子どもも８割前後で，進んで問題解決に向かっているととらえられる。

しかし,「これからもグループやコースに分かれて学習したい」とする子どもが，３学年・５学年・６学年でやや割合が下がっている。これは，グループやコースに分かれて学習する少人数指導に対する抵抗感があるのではないかと思われる。少人数指導で学ぶよさを実感できるような学習指導を行っていくとともに，単なる習熟度別ではなく，子どもの学ぶ意欲を大切にした少人数指導を今後も心がけていく必要がある。

②　保護者への意識調査から

教科，総合的な学習の時間のねらいに照らした設問について，どの程度達成していると考えているかをたずねるアンケート調査を実施した。その結果を示す。

- 平成 14 年度の 5 学年保護者と平成 15 年度の 5 学年保護者の意識調査を比較して示す。
- 教科，総合的な学習の時間のねらいに照らした設問について，どの程度達成していると考えているかをたずねた。
- 比較は，5 ポイント以上差のあるものを示した。

※　評価項目は，平成 14 年度新潟県教育庁義務教育課長「新学習指導要領に関するアンケート調査」の設問項目の一部を使用。

A：とてもあてはまる　　B:ややあてはまる　C：あまり当てはまらない　D:まったくあてはまらない
の４つの選択肢。A と B を選択したものを合計して肯定派とした。

	設問	肯定派（%）		比較
		14 年度	15 年度	
学習全般	やる気をもって，勉強に取り組んでいる	67.9	80.9	↑
	読み・書き・計算などの基礎的な力が身に付いてきて，自信をもつようになっている	71.4	76.6	↑
	考える力や表現する力などが身に付いてきている	75.0	74.5	
総合的な学習の時間	地域の自然や文化，国際理解など，教科の学習以外の学習に関心をもつようになってきている	82.1	80.9	
	調べたりまとめたりする力が付いてきている	85.7	78.7	↓

今年度の調査では，約８割が子どもの学習への姿勢や基礎学力を肯定的にとらえている。総合的な学習の時間に関する関心や身に付けた力についても，８割前後は，肯定的にとらえている。昨年度と比較すると，「やる気をもって，勉強に取り組んでいる」「読み・書き・計算などの基礎的な力が身に付いてきて，自信をもつようになっている」ととらえる保護者が増えている。意欲面と基礎的な事項については，よい傾向にあると受け止められているととらえる。

しかし，総合的な学習の時間の「調べたりまとめたりする力が付いてきている」は減少している。情報処理能力，表現力等について伸ばしてほしいという保護者の願いが伺える。

③　学力検査等の実施と分析による，学力実態の把握

今年度の学力テストの結果はまだ出ていないため，平成 15 年 2 月に実施した学力検査の結果の中から，第５学年の国語科と算数科の結果を示す。

- 学力テスト：ＮＲＴ（集団基準準拠検査）
- 実施教科：１～２学年は国語・算数の２教科，３学年～６学年は国語・社会・算数・理科の４教科
- 上越市，全国の平均も合わせて示す
- 上越市の通過率と比較して，５ポイント以上差のあるものを示した

＜平成 14 年度 5 学年・中領域の通過率＞

国語（通過率）					算数（通過率）				
	本校	上越市	全国	比較		本校	上越市	全国	比較
組み立てを工夫して話すこと	71.1	73.7	60.3		整数についての見方	44.0	42.3	45.0	
話し手の意図を考えて聞くこと	74.1	72.6	68.7		整数と小数のしくみ	81.1	78.8	73.8	
意図・立場を明確にして話し合う	70.7	70.5	69.0		小数のかけ算とわり算	61.0	60.2	54.0	
目的や意図に応じた書き方の工夫	72.8	67.8	64.4	↑	分数と，そのたし算・ひき算	87.3	74.3	61.5	↑
書くことがらを整理して書くこと	69.8	70.7	65.7		概数	69.8	45.0	41.0	↑
文章の組み立ての効果を考えること	65.3	52.0	52.5	↑	面積	50.3	46.9	38.1	
必要な図書資料を選んで読むこと	72.3	71.0	65.7		いろいろな図形，平行・垂直	71.1	64.6	45.2	↑
心情や場面描写を読み取ること	61.5	49.4	47.6	↑	計算のきまり	46.2	34.5	25.5	↑
要旨や文章構成を読み取ること	73.3	60.2	68.8	↑	百分率	45.3	44.6	44.6	
語句の構成と類別の理解	54.7	47.6	38.6	↑	円グラフ，帯グラフ	66.0	56.0	55.3	↑
辞書を活用すること	94.3	90.3	86.0		2つの量の関係や見方や調べ方	53.4	46.1	44.6	↑
漢字の読み・書き，送り仮名	80.7	80.7	64.8						

国語科の「目的や意図に応じた書き方の工夫」「文章の組み立ての効果を考えること」「心情や場面描写を読み取ること」「要旨や文章構成を読み取ること」「語句の構成と類別の理解」の領域で優れている。読み取り，書く力，言語事項などを，よく身に付けているととらえる。算数科では，「分数と，そのたし算・ひき算」「概数」「いろいろな図形，平行・垂直」「計算のきまり」「円グラフ，帯グラフ」「２つの量の関係や見方や調べ方」の領域で優れている。数と計算，図形，数量関係など，全体として力をつけているととらえる。上越市，全国ともの通過率を下回っているものはなかった。

これらの結果を含め，国語科・社会科・算数科・理科の結果を分析し，今年度重点化して指導する領域や単元を明確にして指導に当たってきた。

④　その他の評価

私たちは，教育課程を改善していくために，多面的な評価を大切にしている。前述した意識調査や学力テストの他にも次のような場を評価の場ととらえて，教育課程の改善に生かすための資料を集積してきた。

- 学習の場面や各行事等で見せる子どもの姿やつぶやき，事後に書く振り返りの作文シートの内容
- 職員による年間２回の学校評価
- 学校評議員による年間３回の教育活動の評価
- 保護者による「教育を語る会」での教育活動の評価

⑤　教育課程の改善の方向

以上のような多面的な評価をもとに，次の点から教育課程を改善していこうと考えている。

- 総合的な学習の時間のよさを生かして各教科等で学ぶことができるように，子どもの主体性を生かした教育活動を進める。合わせて，活動構想や指導方法を工夫する。
- 個に応じたきめ細かな指導を実現するために，ＴＴ指導や少人数指導，一部教科担任制などの指導体制を工夫する。

2　今後の課題

次の点を課題とし，今後も研究を続けるとともに，地域の学校へ発信する。

○　学習場面に応じた指導体制を工夫して実践した成果をもとに，教科・領域等に応じた有効な学習形態や指導体制などについて整理する。

○　学習内容の定着や「共に培いたい資質・能力」の発揮を見取るための評価方法をさらに工夫し，個に応じた指導に生かすとともに，評価の考え方や手順を明確にする。

○　自ら問題にかかわり，自ら学びを進めていくよさを発揮できる教育課程を編成し，実践を通して評価・改善を進めていく。合わせて，編成の考え方や手順等を整理する。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

○年１回，２月に学力検査（集団基準準拠検査）を実施する。

・１～２学年で，国語科・算数科の２教科

・３～６学年で，国語科・算数科・社会科・理科の４教科

○ポートフォリオなどにより，中・長期にわたって子どもの学びを評価し，数値でとらえにくい学力の把握に努める。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1　年間６回の公開授業研究会

５月から２月までの間に６回の公開授業研究会を行い，授業公開と協議会を行ってきた。フロンティアスクールとしての研究内容や取組について知ってもらうと同時に，外部の意見を聞く機会とした。また，保護者の参会も募り，フロンティアスクールとしての取組を理解してもらう機会とした。

なお，公開授業研究会の内容や日程等をあらかじめホームページに掲載したり，上越地区小・中学校，教育関係機関に案内文書を送信したりして，参加を募ってきた。毎回，上越地区・県内・県外から 10 名～20 名程度の参加者があった。

２　フロンティア事業中間発表会（２年次）

以下の内容で２年次の中間発表会を行い，成果の普及に努めた。

＜日　時＞　平成１５年１１月２１日（金）
＜場　所＞　上越市立大手町小学校
＜テーマ＞　確かな学力をはぐくむ教育課程の創造
～総合的な学習の時間の学びを生かして自ら学ぶ子どもの育成～
＜対　象＞　上越地区の小・中学校
学力向上フロンティア事業地域協議会委員
本校保護者
新潟県内外のフロンティアスクール
県内外の小・中学校　　等　合計　約 320 名の参加を得た

３　HP の活用

大手町小学校ホームページ（http://www.ohtemachi.jorne.ed.jp/）に，研究内容，研究成果等を掲載し，成果普及の一助としている。

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☒１４年度からの継続校
【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
☒１３～１８学級　□１９～２４学級
□２５学級以上
【指導体制】　☒少人数指導　☒ＴＴによる指導
□一部教科担任制　□その他
【研究教科】　☒国語　☒社会　☒算数　□理科
☒生活　□音楽　□図画工作　□家庭
□体育　☒その他

【指導方法の工夫改善にかかわる加配の有無】　☒有　□無